



公益財団法人

国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM

国際文化フォーラム通信

2013年7月

no. 99

ここにある危機



◎日本はこのままでは世界はおろか、アジアにも取り残されるのではないかと。TJFが発行した『外国語学習のめやす』の監修者、當作靖彦カリフォルニア大学サンディエゴ校教授はこの数年、日本に帰るたびに危機感を募らせている。◎閉塞化した日本社会を打ち破るために何をなすべきか。その思いから『NIPPON3.0の処方箋』を上梓した。今号は、當作氏がさまざまな分野の第一線で活躍する方々に、日本を救う可能性についてお話を聞いた。

【特集】

ここにある危機……………2

- 時代遅れの外国語教育
- 心を受け継ぎ、型を生み出す
- 多様性が強いつながりをつくる
- 社会を巻き込んで
グローバル人材の育成を

TJFニュース……………11

- 理事会・評議員会が開かれました
- TJFを支えてくださっている皆さま
- 「りんご記念日」へ熱いメッセージを!
- 東京でもダンス・ダンス・ダンス
……ほか

掲示板……………16

21世紀に 必要な力を SNAで見る



インタビュー
當作靖彦

カリフォルニア大学
サンディエゴ校教授

2万年分テクノロジーが成長するといわれる21世紀。SNSひとつとってもそれは明らかだ。めまぐるしい変化に対応する能力をもった人材を育てるにはこれまでとは全く違うアプローチ、SNA(ソーシャルネットワークワーキングアプローチ)が必要だと當作氏は語る。

鈴木孝夫氏との対談で、現在の日本社会を取り巻く問題を外国

語教育から整理、提示し、21世紀に必要な力について、華道界に新風を巻き起こした假屋崎省吾氏、気象予報士から社会健康学者に転身した河合薫氏、グローバル人材の育成に関する研究会に数多く参画する井上洋氏に、當作氏がSNAの観点からインタビューした。

特集「ここにある危機」

時代遅れの 外国語教育

慶應義塾大学名誉教授
鈴木孝夫

戦争を放棄した大国日本は、言語力で国を守るしかない、と、長年日本語の国際普及と国連での公用化を唱えとともに、英語教育を受信型から発信型に切り替えて、国益を守る人材を育成すべきだと主張している。近著に『あなたは英語で戦えますか：国際英語とは自分英語である』(富士房インターナショナル)がある。

當作……アメリカで外国語教育に携わって35年になりますが、この数年、日本に帰るたびに閉塞感が強くなっています。21世紀は明らかに20世紀とは異なります。変化のスピードはすさまじく、インターネットやソーシャルメディアが大きな役割を担っています。これからどんな職業が生まれてくるのか想像もできません。そんな状況に日本は準備ができていますか。対応できる人たちを育てているか。答えはNoです。

時代の変化に伴って、求められる力は変わってくるはずですが。それにあわせて社会も教育も変わるべきだと考えています。鈴木先生も10年以上前から、日本の外国語教育を変えるべきだと主張されていますね。

鈴木……まさにその通りです。日本では長い間、外国語教育の主目的は、外国の進んだ技術や知識を取り入れることでした。古くは漢文、明治以降は英語を中心に、ドイツ語とフランス語が加わりました。目的が情報の入手ですから、読むことに重点がおかれていました。つまりずっと受信型なのです。この選択が間違っていたわけではありません。そのお陰で、現在の繁栄があるわけですから。

しかし問題なのは、現在の日本人にとって本当に必要な外国語力とは何か、です。もはや経済大国の仲間入りをした日本は受信だけではなく、積極的に発信していくべきです。それなのに、教育は

いまだに受信型の内容でしかない。

何よりもまず、借り物ではない自分の意見や考えを、外に向かって外国語で立派にいえる人、日本に固有な事情や考え方を外国人に説明して、しかも相手を説得できる人を養成する、外向きで積極的な発信型へと重点を移さなくてはなりません。自分をもっと積極的に売り込む義務と責任があると思いますね。

當作……私自身、その発信型の英語教育を受けなかったので非常に苦労しました。文法や語彙は知っていても、話す内容がない。

ハーバード大学の教育学者トニー・ワグナーが、21世紀を生きる能力を二つ挙げるとすると、「コミュニケーション能力」と「批判的思考能力」だといっています。まったくその通りだと私も思います。コミュニケーション能力については、多くの企業が人材に求める力として必ず上位に挙げます。

ただコミュニケーション能力をどう定義するか、どんな力を含めるかは、人によってかなり違うように思います。さらにコミュニケーションの目的は時代によって変わります。鈴木先生は受信型から発信型へ変えるべきだとおっしゃいました。私もそう思いますし、さらに単なる情報の交換ではなく、情報を伝え合うことによって相手を変えることがその目的だと思うようになりました。

鈴木……その通りです。違った文化の人たちとことばでお互いの意

思や欲望を調整するとか、相手に頼むとか、頼まれるとか、インターアクションすることが求められているわけです。

それから、単なる情報の伝達ではなくて、気心が通ずるような安心感や親和感も必要です。それには、挨拶や雑談が有効なんです。敵意があったり、対立関係だったかもしれないのが、「おはよう」とか「寒いね」ということでほっとする。これが実は、国際的に非常に大事なんです。日本人は国内では上手ですが、外国人となるとそれができない。車やコンピュータなどの技術は優れているのに、人間と人間を結びつけることが苦手なんです。特に外国人に対しては。これは歴史的に見て、日常生活のなかで外国語で気持ちを通じさせる経験がないからです。

當作……その要因は大きいと思いますね。先生は著書『日本人はなぜ英語ができないか』(岩波新書)で、言語を学ぶ目的を大きく三つにわけていらっしゃいます。

鈴木……ええ。例えば最近学ぶ人が増えている朝鮮語。日本とあらゆる面をつなぐの深い隣国の言語で、大変重要な外国語ですが、学ぶ目的は韓国や韓国人をよく知ること、交流することです。これを私は目的言語と呼んでいます。

次に、フランス語とドイツ語。これらを学んだのは、近代化するために知識や技術の情報を得る必要があったからです。これを手段言語と名づけました。

當作……なるほど。例えば、料理やファッションのためにフランス語を学んだり、登山技術や声楽の勉強に役立つからドイツ語を勉強する人たちは、確かにそうですね。

鈴木……では英語はどうか。学ぶ人が何を求めるかによって、目的言語にも手段言語にもなりますが、もう一つ目的が加わるので交流言語ということにしました。英語はいま世界中でもっとも使われていることばです。一般の日本人はこの国際補助語としての英語の獲得を目標とすべきです。

私は、この国際英語は自分英語だといっているんです。英語という株式会社の株主が日本人、アメリカ人、イギリス人……。株が多いほど発言権がある。日本人は1億2,000万いるんだから、ネイティブを目標として舌をかむような練習を苦勞してするのではなく、俺の英語にお前のほうが慣れろとやればいいんです。インド人がまさにやっています。

當作……日本人は、ネイティブスピーカーのように英語が話せることをめざしてきましたからね。イギリス英語とかアメリカ英語とか分類していますが、中国の英語話者数はまもなくアメリカの人口を超えるそうですよ。そうなると、分類自体成り立ちません。英語の概念そのものが



変わってきているのに、日本人は変わっていないんですね。

鈴木……そうです。「お生まれはイギリスですか」といわれることを目標に勉強してきた英語の先生は、イギリス人と話すとなるとオックスフォードの英語とは違うといわれることが怖し、アメリカ英語を聞くとびっくりしてしまう。そして結局逃げてしまう。それがエンジニアやお医者さんだと、英語が下手でも話し合う内容に自信があるから堂々としています。

世界の国々ともっとも言語による情報交流を強化していかなくてはいけないんです。そのためにも自分英語ですよ。ただ日常生活では練習する場所がない点がインドなどと違うわけです。英語教育のなかにもその発想はない。

當作……まさに日本の教育は外国語に限らず社会と乖離しています。教室と社会を結びつける必要がありますね。

鈴木……だから、外国で英語を使って仕事をした人を先生にしたらいいんじゃないかと思うんです。アメリカでバリバリ営業をしていた人とか……。そして変なネイティブスピーカー信仰もやめて、アフリカやアジアの出身で英語を話す人をどんどん入れていけばいいんです。それで、日本人に合った英語をめざせばいいんです。小学校の段階だったら、例えば学校の帰りに犬に追いかけられたとか、自分のこと、自分の体験を英語で表現するようにするんです。アメリカの授業でやっているShow & Tell的なものですね。そして、日本のことを英語で書いた教材を使うことです。

當作……そうですね。アメリカでは幼稚園からShow & Tellが組み込まれています。私はそんな教育は受けたことがありません。それで大人になっても自己表現ができない、さらには自慢するのは恥ずかしいと思うこととあいまって、なかなか日本の良さを他人に伝えたり、日本の技術を外に出すことを難しくしているのではないかと思いますね。

2001.9.11のテロがあった夜に、FBI長官がテレビで、アラビア語ができる人はこの無料の番号にすぐ電話をかけてくださいと放送しました。アメリカは外国語教育にそれほど関心が高いとはいえませんが、すぐにそうやってことばのできる人を集めました。日本人はこの点非常にナイーブですよ。

鈴木……友好のために英語をやるというのは、抜きがたい日本の英語教育の中心思想です。ところが、国際関係の本質はケンカなんです。外交関係というのは、互いにハグしながら机の下で蹴り合う

わけですね。ところが日本人はハグはうまいんですが、蹴とばせないんです。それは、日本人同士が子どものころから、相手を言い負かすことをやっていないからです。ディベートなんていうのは、自分が信じていようといなかつたら、相手を負かすためには、太陽が東から昇るっていうのは実は嘘で、西から昇ると昨日発表されたんだと、いろんな理由を挙げて説得する。つまり、嘘をうまく気づかれずに相手にのませるための技術なんです。ディベートはローマが起源ですが、ローマの弁論術は嘘でも何でも相手をぎゃふんといわせたり感動させたりする、ことばを武器として使えるようにするものなんです。

當作……まさに。だますこともコミュニケーションの一つです。これが相手を変えることだと思うんですね。先生はアメリカは敵のことばを勉強するともおっしゃっています。

鈴木……いま日本では国家にとって必要だからこのことばを学ぶという意識がなくなつたんですね。

私は慶應義塾大学の藤沢キャンパスで学ぶ対象から英語を省きました。英語は手段として、授業を受けることでブラッシュアップする。そして、学校でしか学ぶ機会のない、例えばアラビア語を勉強

させるんです。英語だけでなく、日本にとって必要な言語もやる必要があります。

多言語主義、多言語学習に変えようということに大賛成。外国の攻撃をどうやってうまくさばるか、日本はことばでやるしかない。だから武器に代わるものとしてのことばなんです。

それと英語は選択制にするといいと思います。英語は日本人みんなに必須なわけではない。英語がなくても立派に成功します。でも英語ができる人間は絶対に必要なので、学校ではやる気があって能力がある人だけを徹底的に鍛えるといいんです。

當作……グローバル化が進むなかで、いつ何があるかわからない。戦争を防ぐためにコミュニケーション、外国語は非常に大切な役割を果たすのです。しかし、英語一辺倒であれば、何か起こったとき、韓国語ができる人がいないとか、韓国の文化がわかる人がいないとかになってしまいます。

変わらない英語教育、外国語教育。日本はこのままいくと危機的な状況に陥ると思います。その状況から脱するために、社会を変えていく、教育を変えていくことが必要だと強く感じています。

心を受け継ぎ、 型を生み出す

假屋崎省吾

華道家

美輪明宏氏より「美をつむぎ出す手を持つ人」と評される。パリで個展を開催するなど目覚ましい活動を展開している。今年は、華道歴30年を記念した個展を日本橋三越(8/7～)、目黒雅叙園(9/20～)、北鎌倉・円覚寺佛日庵(10/30～)で開催する。詳細は<http://www.kariyazaki.jp/>をご覧ください。

當作……歴史的に見て、日本は新しい文化や技術を自分たちの伝統文化や生活にうまくアレンジして取り入れることを得意としてきました。假屋崎さんはそれを超えて、伝統文化である華道界で新しいものを生み出しています。まさにイノベーターそのものですが、伝統を守ることに新しいものを生み出すことをどのようについでいますか。

假屋崎……歌舞伎でもお茶でもそうですが、伝統には型があります。いけ花は400年の歴史があって、流派が3,000あるともいわれています。

その流派ごとに特徴があって、先人がつくった型が脈々と受け継がれているのです。

でも、型にとらわれて、それだけを繰り返しやっていると、形骸化して心がなくなってきます。日常生活も同じで、感謝の気持ちやお礼を品物にかえると、形だけになると伝わらない。まずは心がいちばん大事です。

それと同時に新しい型も生

み出していかななくてはいけない。例えば、Aという型を100年、200年、300年受け継いでいく。それはそれでいいのですが、Aが最初に生み出されたとき、すごいことが起こったわけです。どの時代にも新しい型を生み出そうとするエネルギーがとても大事だと思います。もちろん、生みの苦しみはあるでしょう。でも、新しいものを生み、それを育むのです。そして振り返ったら、それもまた一つの伝統になっている。その積み重ねで、どんどん型が増えていく。一方で、なくなっているものもあります。時代とともに新陳代謝が起こることがまさに伝統を受け継ぐことだと思います。

新しい型を生み出すとき、誰もやっていないからといって、奇をてらったことを狙って面白がらそうとしても、それがうわべに過ぎなければ、10年、30年経つうちに消えていきます。それは本物ではなくて、こけおとしにすぎないのです。

10年、30年後に気がついたら、みんなが重んじてくれるものが新しく伝統の仲間入りできるのです。そういうことがいけ花の世界にもあっていいと思い、私は常に新しい挑戦をしています。

當作……着物の世界でもお仕事をされていますよね。分野の枠にとらわれず、いろいろなことに挑戦するのは、21世紀を生きるのに大事



なことです。どんな考えで着物のデザインを始められたのですか。

假屋崎……私がつくる花の世界を着物でも描いてほしいとオファーがあって、5年前からデザインをさせてもらっています。着物はかつて2兆円産業だったのに、現在は2,000億円とマーケットが非常に小さくなっています。着物は日本人として残していかなければいけない文化で、そのために自分ができるならばやらなければ、と使命感をもったんです。

最初に振袖をデザインして、次にかろやかな小紋、付け下げ、帯、さらには婚礼の打ち掛け、そして今後は七五三用のデザインもしていく予定です。皆さんに喜んでいただいて、私自身とても楽しいです。

當作……過去にとらわれず、新しいものをつくられているわけですね。アメリカの教育学者トニー・ワグナーが、社会を変えていくイノベーターの要素として、まずは自分が楽しむ(play)、情熱(passion)をもって新しいことに取り組んで、理念(purpose)をはっきりもっている、この三つのPが必要だといっています。もう一つの伝統文化である着物を守りたいという信念は、社会を変えていく活動の第一歩だといえます。どんな苦労がありましたか。

假屋崎……モノづくりなら、みんなに受け入れられたり、社会の役に立つ、あるいは特許が取れて残っていくものもあります。しかし、華道の世界にはありません。いくら新しいデザインを生み出しても、みんながまねをして終わりなんです。でも、自分が新しく生み出したものが良しとされているわけですから、自信につながってきます。

例えば、ある時まではお店のウィンドウに植物を飾ることはありませんでした。枯れますから。

ウィンドウのディスプレイを頼まれたときに、どうしてもやりたくて、鉢植えのサボテンを取り入れました。床を土で塗りこめて、1ヵ月間やりました。別の機会には、アンセリウムというハートの形の花を挿したガラスコップを小さい箱に入れて、たくさん箱でウィンドウを満たしたんです。一本ずつ全部表情が違うアンセリウムに、人間もひとりずつ違うというメッセージを込めました。これはディスプレイの賞をもらいました。今や、いろんな人たちがウィンドウに植物を入れています。私の「型」がみんなにまねされたわけですが、それでいいのだと思いますね。

もちろん、みんながみんな評価してくれるわけじゃありません。嫉妬やねたみがあり、足を引っ張られることもあります。根も葉もないうわさが立つこともあります。そういうものと日夜闘っていかねばならない。でも、実は負けず嫌いでもあって、今に見ておれと思うわけです。そして全部肥やしになります。結局は私の力となって、10倍、100倍にして返せることになるんです。

當作……どんな状況でも自らに働きかけ、自ら発展していつているのだと思います。どのような努力をされているのでしょうか。

假屋崎……私は美しいものに対する思いが人一倍強いんです。そこ



で1ヵ月に1回、美を仕入れに海外に行くことにしています。ですから1週間は、月月火水木金金、です(笑)。めいっぱい仕事をしています。それから、映画、クラシック音楽など、自分の趣味に合う美しいものを、シャワーを浴びるように、身近に感じる環境をつくっています。美のエッセンスが血となり肉となり細胞となって、自分のなかに凝縮され、蓄積されて、いざ何かをやろうというときに、これとあれとあれをコラボさせてやってみようみたいなことがぼんと出てくるんです。花しか見ないのでは、美のほんの一部しか扱えないと思います。

當作……教える立場になっても、自ら率先してさまざまな分野を学び続けているわけですね。

假屋崎……そうです。人間は一生学んでいかなければいけないと思います。これで終わり、これで完璧というのであれば、そこで終わりです。後は死にかなと思うんです。だから命のある限り自分はいろんなものに興味をもって、いろんなものを体験したり挑戦したり、美しいものをいつでも自分の周りに手繰りよせていきたいと思います。しかも嫌々ではなく、自然とやるのが大事なんだと思います。

當作……現在、教室に約700人が通われているそうですね。どうやって生徒さんに同じ意識、意欲をもたせるのですか。

假屋崎……私はとにかくほめることにしています。小さいころバイオリンを習っていたときに、その先生がちっともほめてくれない。自分なりに上手になったんじゃないかなと思っても、まだまだというばかり。バイオリンが好きだったのに、お稽古自体が嫌いになって、やめてしまいました。その後、ピアノを始めましたが、この先生はおおらかで、ほめてくれるし、もっと上手になるために具体的なアドバイスをしてくれました。次のレッスンにいきたくないなって気持ちにさせてくれたんです。

いけ花を始めたころにも、何にもほめない、悪いところばかり指摘する先生と、素敵ねってほめてくれる先生がいました。両方の先生を経験して、やはりその人のいいところを伸ばすにはほめることだと思ったんです。

當作……チャレンジして失敗したときに、その失敗を叱責するのではなく、チャレンジしたことをほめる姿勢ですね。すごく大切なことですね。

假屋崎……お月謝1万5,000円を払って、新潟や静岡、北海道、沖

縄など遠方からいらっしゃる生徒さんもいっぱいいます。皆さん、本当に一所懸命です。どんな方にも、いいところ、美しいところ、頑張ってるやっところが必ずあるんです。それを見抜くこと、そして、ここをこうしたらもっと良くなるの的確にアドバイスをすること、それが指導者には必要だと思います。前回いけたお花を覚えておいて、同じパターンが続いたら、新しいものをやってみようということがあります。

これは極端な話ですが、探しても探してもいいところがない、百合がきれいだとか、バラがきれいだとかしかいえないときもあります。そのときは、今日のファッションはなんて素敵なんだろうと、みんなの前でほめるんです。そうすると生徒さんは、来てよかった、次も頑張ろうと思うわけです。プラスになるもの、気持ちが明るくなること、帰って楽しかったって話ができるようなことで教室を満たしたいと思って、20年近くやっています。

當作……假屋崎さんのようなイノベーターがさまざまな分野で増えていかないといけません。イノベーターには何が必要だと思われませんか。

假屋崎……まず自分自身をしっかりもっていること。そして信念をもって、何事にも負けないで突き進んでいくことだと思います。具体的には美輪明宏さん。あの方をおいてはいらっしゃらない。

それから、やっぱり教育はとても大事だと思いますね。海外にはよく行きますが、語学が苦手です。自分がおろそかにしていたことが原因ではあります。でも、ヨーロッパの人たちは子どものころからいろいろなことばを耳にしているので、何ヵ国語もしゃべれたりしますよね。人とことばでコミュニケーションをとることは、生活する上で基本中の基本です。その基本的なことで苦勞するのは本当に損なことだと思います。

うわけです。

今は小学校から英語を勉強しますが、ことばとして、話したり聞いたりすることができるように教えてほしいですね。

當作……まったく同感です。私もアメリカに最初に行ったときに、たくさん勉強したはずの英語が聞き取れず、思うようにしゃべれずで、辛い思いをしましたから、当時の英語教育を恨んでいます。もう一回、4、5歳に戻ってやり直しができるとしたら、何をしたいですか。

假屋崎……とっと、海外にほっぽってもらいたい(笑)。ヨーロッパで暮らして、ピアノを3、4歳ごろからやってみたいですね。

當作……まさにSNAの考え方ですね(笑)。泳ぎを学ばせるのに、手のかき方や足の動かし方を陸で学んでからプールに入るのではなく、いきなりプールに入ることを推奨しています。

假屋崎……もちろん、小さいころから好きなことをさせてくれた両親には感謝しています。初めて個展を開くチャンスが訪れたとき、母は虎の子の貯金を取り崩してポンと出してくれました。その個展では、亡くなった父への詫び状と感謝状として、自分と父を結んでいた園芸を象徴する土で作品をつくりました。これが現代美術の方々からもユニークだと評価され、活動の場が広がったのです。

母には、「あなたはあなたでいい、好きなことをしなさい」とずっといわれてきました。そうやってどんなときでも私の背中を押してくれたり、そっと見守ってくれたりしたのです。今こうやって生きていられるのは父と母のおかげだと、ふたりを亡くしてからよけいに感じます。

當作……お母様が、いってみれば假屋崎さんにとっての「リスクを恐れない社会」の役割を果たしてくれたのですね。

多様性が強い つながりをつくる

健康社会学者・博士(プロ保健学)
気象予報士

河合薫

東京大学大学院医学系研究科講師、早稲田大学非常勤講師を歴任。産業ストレス、キャリア発達などが専門。『話が伝わらなくて困ったときに読む本』(すばる舎)、『上司と部下の「最終決戦」』(日経BP社)など著書多数。

當作……SNAの話をするときに、河合さんのアラバマでのエピソードをよく使わせてもらっています。お父さんの転勤で、小学生のとき英語がわからないままアラバマに行かれたんですね。近所のミリンダに初めて遊びに誘われて、悪戦苦闘の末、何とか通じ合えたそうですね。

河合……あのときは、ミリンダが話すことが全くわからず、唯一なんとなく覚えていた「ホワッチャーネーム？」を、いってもいっても通じない。「Name?」とだけ聞けばよかったのですが、「ホワッチャーネーム？」＝「What's your name?」ってことすらわかっていなかった。それで2時間ほど経っても通じなくて、仕方なく掌を胸にあてて「かおる」と言い、手をミリンダに向けて首をかしげることを何回か繰り返した。そうした

らミリンダが「Oh, Your name! Kaoru!」と言ってくれたんです。それで次に誕生日を砂に書いてくれて……。

ことばがわからなくても、ミリンダとつながりたいという強い気持ちを私がおもっていたから、わかり合えたのだと思います。伝わったときの喜び、人とつながったときの喜びを初めて感じた経験でした。

當作……ミリンダとつながりたいと思い、何とかして伝え合う。ここにことばの力、コミュニケーションの原点があります。だからSNAでは、まず経験することを大切にします。

河合……ミリンダとの経験は、単にことばがしゃべれるかどうかだけではなくて、人とつながることの喜びと自分でも何かできるんだという自信をもたらす最初の大きな大きなきっかけになったと思いますね。そ

の後は英語がわからなくてもひたすらニコニコすることで友だちが増えていったのですが、それもミランダとの成功体験があったからだと思えます。

當作……それは、本で学ぶのではなく、実際に人とつながったことが大きかったと思いますね。人間は「社会的動物」ですから、社会活動のなかで学ぶことがいちばんなんです。また真のコミュニケーションによって、多様な個が効果的に組み合わせたり、より強い「つながり」ができ、それが変化に対応できる柔軟な社会をつくります。

アメリカの高校で勉強した帰国子女の日本人の学生が日本の大学に入ったものなじみなくて、私の大学に入り直すケースがよくあります。河合さんもアメリカと日本の学校を経験されていますね。どう考えられますか。

河合……その状況はよくわかります。アラバマで小学4年生から中学1年生までの感受性の強い時期を過ごしました。日本に帰って、地元の中学校に転入してしばらくして、一つ上の先輩に呼び出されて、こう言われました。「あんた生意気なのよ。何目立ってるのよ」と。

日本では目立っちゃいけないんだ。人と同じでなくちゃいけない、1番じゃなくて2番、2番じゃなくて3番がいいんだと考え、目立たないように心がけるようになりました。

アメリカでは小学校のときから、いかに個として生きていくか、独立していくか、どうやって自分を輝かせるかが大きなテーマでした。だから、中学校に入った途端に、女の子たちはみんなリップクリームを塗って、髪の毛をくるくるさせたり、体型を強調するような服を着たり……。でもそれは他人と競うわけではなくて、いかに自分をかっこよく演出するかなんです。

アメリカでは自己表出しろ、そうしなければ生きていけないんだぐらいのことをいわれていたのに、日本は逆だったわけです。息苦しくて仕方なかったですね。

當作……留学生も含めて、異なる経験、価値観をもつ人たちは本当はいりそりなんです。私はアメリカに行って、多様性は力であることを強く感じています。日本ではほかの人と違うことはマイナスです。リソースを生かしきれていないんですね。

河合……そうですね。それは今も続いていますし、むしろこの数年、強くなっているように思います。私は大学で教えているのですが、学生は仲間はずれにされることをすごく恐れています。そうならないように、集団のなかで演じるわけです。

人とつながることはとても大切だと思うけれども、人とつながって集団をつくることでマイナスはあるかと学生に聞いたときに、声の大きい人に合わせなくちゃいけない、いいことをいえない、と一斉に声が上がったのには驚きました。個をアピールしてひとりになる勇氣はないし、仲間からはずれることは、負け組になるようで怖い。帰国子女だけでなく、多くの学生たちが窮屈な思いをしているんです。

ダイバーシティだとか、多様な価値観を認めようというしながら、むしろ一つの価値観の方向に向かっているのではないかと危機感を

もっています。

當作……自分の個性を押し殺しては、本当につながることはならないですね。一人ひとりが輝くには、自分で機会をつくりだして、積極的に学び続けていく必要があります。河合さんは、国際線のキャビンアテンダント(CA)から気象予報士、そして現在は健康社会学者として活躍されています。



違う分野に進むことにはリスクが伴うと思いますが、リスクに対してどんな認識でしたか。

河合……私のなかではリスクを冒していると思ったことはありません。ゴールを設定して、そこをめざしてキャリアを積んでいくのが理想的だと思いますが、私は目標を掲げて動けるようなモチベーションの高い人間でもなく、ただただ面白いと思ったこと、やりたいと思ったことをベースにこれまで生きてきました。大学に入るときあまり深い考えもなく、就職するときもたまたま乗ったエアラインのCAがとてまかっこよくて、あこがれてCAになりました。

でもCAになって、働くことの楽しさを知りました。働くことで自分が成長するのが楽しかったのですが、航空会社のいちCAとしか見てもらえない窮屈さを感じるようになりました。もっと自由に、自分のことばで伝える仕事がしたいと思うようになったんです。

でもそれは勘違いもはなはだしいことでした。だって、伝えるべき内容が自分にはなかったんですから。CAを辞めて初めて自分と向き合われました。自分のことばを求めてお天気の世界に入り、そのうちお天気とカラダや心の関係に興味をもって。それからさらに、人間関係や働き方が心に与える影響を知りたくって、東京大学大学院で健康社会学を研究することにしたのです。

當作……なるほど。リスクだとは思っていなかったんですね。これからは高次元の思考能力が必要です。これは多くの新しい情報を批判的に見て、必要性を判断、評価し、取捨選択することです。それをまさに実践したことで、正しい決断になったんですね。

河合……「正しい」決断だったかどうかは、決断したあとの「自分」で決まると思います。例えば、気象予報士試験の1回目の合格者は500人で、うち12人が女性、私はそのひとりでした。合格当日、テレビ朝日の「ニュースステーション」に出演して気象コーナーをもたせてもらいましたが、それは「気象予報士第1号に日替わりで出演してもらって、天気予報をしてもらおう」という番組の企画でした。その出演

がきっかけでレギュラーで出演することになりました。私が民間の気象会社で気象予報士の資格をゴールとするのではなく、自分のことばでお天気を伝えるために勉強して仕事をしてきたという、日常があったからです。目の前のことに地道に取り組む。そして、それを十分に楽しむ。その積み重ねが、「あの決断で間違っなかった」と決断を成功に導くのだと思います。

當作……まさに、インベーターに必要な三つのPのplayの部分(5ページ参照)で、仕事として考えず楽しんでやる姿勢ですね。日本の学校では先生が教え過ぎていて、子どもたちから発見する喜びを奪っているのではないのでしょうか。

河合……私は6年前から、中学校の理科の教科書作成に気象予報士として関わっています。現在平成28年版をつくっています。教科書づくりでは、いかに子どもたちの興味を引き出し、なぜそうなのかを知りたいと考えさせるためにはどうすればいいか、をあれこれ考えます。

子どもたちに考えさせるには、大人が準備した答えありきの問題ではだめなんです。例えば、「何で雲は浮かんでいるのかな?」と、子どもに問いかける。答えは何でもいい。「目に見えない棒が支えている」でもいいし、「浮いているように見えて実は浮いていない」でもいい。自由に頭をクルクルさせればいいんです。

先生はひたすら、「何でそう考えるの?」と子どもたちの考えを促す。知的な遊びを楽しめばいい。でも、今の中学校ではこれがなかなか難しい。授業をしたら、ちゃんと理解できたかを評価しなければなりません。すると、正解のある問いしかできなくなる。子どもたちに、考える自由を先生が与えられない。大人のほうががんじがらめになっているんですね。

當作……そうやって生徒たちに考えさせるのは、まさに批判的に物事を見ることになりますね。そもそも知識は先生の頭から生徒の頭へ移動するものではありません。形づくられるもの、なのです。間違ってもいいから、自分でいろいろ考えて、いろんな分析をやってみることが重要だと思います。日本は点数で評価しようとするから、正解を出さ

なくちゃ、間違っちゃいけないとなる。教育に根本的な問題があると思いますね。

河合……仕事や将来へのキャリアデザインも同じだと思います。何もこんな仕事があるよ、あれがあるよと示すのがキャリア教育ではなくて、興味をもったこと、面白いと思ったことを行動に移させるようにすることです。

今の教育で子どもたちは、誰かが育てた野菜を選んで、おいしいサラダにしているだけだと思うんです。本当の教育は、「どんな野菜をつくってみようかな?」と興味をもつことから始めて、その野菜をつくるのに、どんな畑でどんな土を使えばいいのかと知識を広げ、台風や干ばつを乗り越え収穫し、そこでやっとサラダが完成する。この思考の連続が教育です。

ある時期までは、人から教えられることを吸収することも思考力を豊かにするためには大切です。でもそれだけではだめで、自分が知りたいことや、自分の興味を深めていくプロセスも必要で、その両方がうまく重なって初めて本当においしいオリジナルのサラダができるんじゃないでしょうか。

當作……またミランダとのエピソードに戻りますが、コミュニケーションの目的はやはりつながることだと思うのです。

河合……ネットやメールが普及した時代だからこそ、直にふれたり、会ったりして、五感をフル活用することがコミュニケーションを図るうえでとても大事だと思います。今回も、事前に送っていただいた質問を見ただけでは當作先生が何をお聞きになりたいのかははっきりしなかったのが、実際にお会いしてみると、トーンだとか、表情だとかで、何を聞こうとしていらっしゃるのかわかりました(笑)。

空気を共にすることでしか、コミュニケーション能力を高めることはできないし、自分の目で見て、自分で感じて、自分で決めることがいちばん求められていると思います。

當作……そうしたものを全部駆使して、つながるコミュニケーション能力を一人ひとりが身につける必要がありますね。

社会を巻き込んで グローバル人材の 育成を

一般社団法人
日本経済団体連合会
社会広報本部長

井上洋

2011、2013年経団連が発表した「グローバル人材の育成に向けた提言」、経団連の新ビジョン「活力と魅力溢れる日本をめざして」(2003年)、「外国人受け入れ問題に関する提言」(2004年)などの取りまとめを行う。

當作……井上さんは経団連や各省庁が主宰するグローバル人材の育成に関する研究会などに数多く参加していらっしゃいます。今ビジネスの世界では、どんな力をもっている人が必要とされていますか。

井上……英語でコミュニケーションをとる力が基本になりますが、それ

以上に重要なのが、個々人の素養や教養です。例えば、海外に行った若いビジネスパーソンが苦勞するのは、日本について説明を求められたときです。単に歴史や文化を知っていればいいいわけではありません。日本と諸外国の文化や価値観を自分なりに把握し説明

することが重要で、それには深く幅広い教養が必要です。

當作……それは、私が監修した『外国語学習のめやす』(TJF発行)で提示している「文化領域」の「わかる」にあたります。外国語を学ぶときに言語だけではだめで、文化に関して「わかる」(自他の文化がわかる)、「できる」(多様な文化を運用できる)、「つながる」(多様な文化背景をもつ人とつながる)が必要だと思いますね。

井上……自分が身につけている知識、スキルを状況に合わせて瞬時に選り出して対応する力も必要ですね。例えば、ラグビーの世界では、アンストラクチャープレーにあたります。ストラクチャープレーは、ラインアウトやスクラムなどから始まるセットプレーで、練習して組み上げた決まりごとで攻撃し、トライを狙っていきます。しかし、ゲームが途切れることなく続いているなか攻撃のチャンスを得たとき、どの決まりごとを使うかを瞬時に選択し、有利な展開につなげていくのがアンストラクチャーです。さらに重要なのはオフロード対応で、例えばタッチライン際でタックルを受けたときに、倒れながらも後ろでフォローする仲間をパスし、自軍の攻撃を継続させるプレーです。非常に混乱している状況で、自分を殺しながらも仲間を生かすわけです。非常に厳しい状況におかれても動じない心、臨機応変に対応するスキルが必要になってきます。型にはまった仕事しかできない人はこういったことをするのは難しいのです。

當作……まさにそれは「できる」です。私は、言語領域、文化領域、さらにはグローバル社会領域全部を含めてコミュニケーション能力だと思っています。企業ではどのように捉えていますか。

井上……企業が求める力の上位にコミュニケーション能力が挙がっていますが、主体性、実行力も同じように重要だと考えています。これら三つは切り離せるものではなく、新入社員の採用選考をするときのポイントでもあります。企業人は組織人でもあります。まずは物事を主体的に考え、一緒に働くチームのメンバーに説明する。それが採用されれば、チームのメンバーと一緒に取り組み、その過程でいろいろ話し合いをする。そして一定の成果が出たら、出てきた課題をより広い関係者に共有してもらおう。それぞれの段階で必ずコミュニケーションは必要です。そして、より良い成果を出すために、再び主体的に考え、取り組んでいく。そうしたことを連続的に回していく能力が重要だと思います。この能力はただ相手と話をするとか、聞き上手だとか、そういったことではありません。物事を前に進めるための能力です。ところが、こういう行動を伴うコミュニケーションがうまくできなかったり、苦手な若者が最近多いという印象を私はもっています。

當作……私もそう思います。コミュニケーション能力とは、他人を説得したり、関係を築きコミュニティをつくる力も含めたものです。企業ではこうしたコミュニケーションが苦手な若者に対してどんな手を打っていますか。

井上……まずは大人との接触を多くもつことが大切だと思います。年少者への犯罪が増えてきたことで、学校や保護者の警戒心が強くなって、小学生は近所のおじさんやおばさんと話をする機会が減っ

ちょこっと知っ得:ラインアウトとスクラム

ラインアウトは、ボールがタッチラインの外に出た後、試合を再開するために、両チームのメンバーが2列に並んでいるところにボールを投げ入れること。サッカーのスローインにあたる。スクラムは、ボールを前に落とすノックオン、前に投げるスローフォワードなど軽い反則があった後に試合を再開するときに行うプレーのこと。基本は両チームのフォワード計16人が組み合い、その組み合った中央に、一方のチームのプレーヤーがボールを投げ入れ、両チームで奪い合う。

てきています。そんな子どもたちが大学を出て企業に入り、いきなり国籍の違う人たちと話をせよといわれても、それは難しいでしょう。

ですから経団連では上智大学と連携して、金融、商社、メーカーなど12社から20代から50代までの社員を毎週派遣してもらい、グローバル事業の実態について講義してもらっています。担当している上智大学の先生が、「ここに来ていただいている企業の方々は、極端にいえば大学生にとって、先生や親以外で初めて接する大人かもしれない」と言っておられました。

當作……私が教えている大学院では、私の研究室の並びに13人の教授がいますが、そのうち8人が外国生まれで、その大学で学んだのは私だけです。異なる出身国、異なるバックグラウンドをもった人が集まっているわけです。ここからクリエイティビティは生まれてきます。日本の企業ではどうでしょうか。

井上……日本の企業もかなり変わってきています。経団連に加盟している主要な企業はグローバル企業で、海外事務所で雇用する従業員が全体の7、8割を占めているところもあります。そのなかで労働条件をグローバル化しようとしています。つまり、課長職なら、ニューヨークでも北京でも東京でも、あるいはアジア、中東、アフリカであっても、どこでも給料を同じにするのです。ただ、それにはインフラが必要です。社内の人事制度、評価制度に加えて、言語、ことばです。英語を基本にするとしても、それだけでは足りません。

例えば、上海のインターナショナルスクールでは、英語、中国語、それにフランス語を中学1年生から習っています。母語と英語とプラスアルファでもう一つの言語ができないと、グローバル人材といえなくなっているのです。その認識は、日本ではまだ低いかもしれませんね。

當作……もっと多様性を高めるためには、さまざまな経験をさせることが肝要です。しかし最近では外交官でさえ海外に出たがらなないと聞きましたし、日本からの留学生も減っています。

井上……留学生の数がずいぶん減ったのはとても残念なことです。しかしその一方で、進学先として海外の大学を最初から選択する学生も出てきています。経団連では、ユナイテッド・ワールド・カレッジ(United World Colleges:UWC)❖に毎年高校2、3年生を15人ほど送っています。国際バカロレアのディプロマを取れる世界のボーディングスクールに行くわけですが、一時期40人しか応募のない年もありました。今ようやく100人近くまで復活してきています。国際バカロレアを取った彼らの半数は、海外の大学に進学します。



また、経団連も長年関わっている大学の一つ、APU(立命館アジア太平洋大学)は、海外からの留学生が半数を占めています。日本にいながらにして、海外の若者と付き合うことができます。

日本の大学でも、海外で学位を取った外国人が英語で講義をするようにするなど、グローバル化に対する意識を高める対策が必要だと思います。

◆ユナイテッド・ワールド・カレッジは、世界各国から選抜・派遣された高校生を受け入れ、国際感覚豊かな人材を育成する民間教育機関。入学者は国際バカロレア(IB)のカリキュラムに則った授業を約2年間受ける。IB資格は、国際的に認められている大学入学資格の一つで、世界の有力大学の入学試験が受けられる。

富作……かつて日本はウォークマンなど世界に先駆けてイノベーションを起こしてきました。バブルがはじけて、自信をなくしたこともあるかと思いますが、もっとイノベティブなことが出てこないといけません。企業の方々はイノベーションをどうやって育てていますか。

井上……企業にとって成長の原動力は人材です。人材をいかにうまく育成するか。企業だけでなく、教育も含め社会全体のシステムに組み込んでいく必要があると思います。冒頭に申し上げた、深く幅広い教養をもたせることです。

例えば歴史です。学校では近代をほとんど教えずに終わるようですが、実はそこが今、もっとも問われているところです。日本がなぜあの戦争に向かってしまったのか、連合国はどういう発想で日本の独立を認めたのか、いろいろな意見を聞かないと理解できず、自身の意見ももてません。教師が教えられないところを生徒が主体的に学び、考えたりするチャンスがないと、海外に行ったときに問われても何も答えられないわけです。

富作……今度刊行した『NIPPON3.0の処方箋』(講談社)でも紹介しましたが、アメリカでは一つのテーマ、例えばベトナム戦争で1年間歴史の授業をやったりします。独立戦争や奴隷解放について教えなくても事実や知識は本を読めば十分にわかる。その事件を分析し、現在の私たちの社会や文化、政治などにどんな影響を与えたかを深く考える力を身につけさせるのが教師の仕事だ、というのです。こうした力は、生涯を通じて自立した学習をするためにも必要だと思います。

井上……それからどんな意識をもたせるかも大切です。大学に入っていくなり、「君たちはグローバルに活躍しなくてはいけない」といわれても面食らうと思います。

最近企業は中学、高校などでキャリア教育に協力しています。企業に入るとどこに赴任して、どのような仕事をするのかを聞くだけでも、海外に出ていくイメージや、事業に成功するためのポイントがわかってくると思うのです。

富作……アメリカでは親が1週間に1回ぐらい学校に来て、仕事の話をしたり、親の職場で一日過ごす日があったりします。また、インター

ンシップをやらないと高校を卒業できないとか、やっていたら大学入学にプラスになるとか、働く場と密着したキャリア教育を行っています。

井上……それから日本では一日でも早く大学を卒業し、企業に入って働きたいという若者が多いのですが、焦ることはないと思いますね。多様な職業を疑似的でも体験しながら、自分が進む分野の勉強をしっかりと、大学院まで進むことがグローバルに活躍する際に求められています。時間をかけて、社会に出ていってもいいのではないかと思います。

就職活動でなかなか内定がもらえないのは、実は企業と学生の意識に差があることが問題なのかもしれません。企業側は、グローバルに活躍できる人材、すなわち心身ともに非常にタフでどの国でもやっていたる知恵をもっている人材を求めているのですが、学生は企業に入る前に多様な経験ができていない。結局、「君は何ができるのか」「何がしたいのか」と問われたときに、きちんと答えられないのです。きっかけは誰かの薦めだったり、経験談だったりするのかもしれません。10代のうちから主体的に考え、行動する機会をもつべきです。親や教師のいうことに反発するくらいがちょうどいいのです。

その上で、自分は国内で活躍する場を見つけないといけないのなら、徹底してその分野を勉強し、経験を積んでいけばいいと思います。何も大学を出て企業に入り、世界を相手に仕事をするだけが人生ではありません。17、18歳の段階で自分は何を生業にしていこうかを考えてもらうために、大人の側がいくつかのメニューを用意し、選択させていけば十分なのではないでしょうか。

富作……世界がグローバル社会としてヴァージョン3.0に突入しているなかで、日本だけが取り残されているといっても過言ではありません。ニューヨーク・タイムズのコラムニスト、トーマス・フリードマンが『フラット化する世界』(日本経済新聞社)のなかで、グローバル化の段階を次のように定義づけています。各々の国の主導で進んだヴァージョン1.0、多国籍企業が主導した2.0、そしてICTの発達で根本から経済構造が変わってきた3.0。中国、韓国をはじめ東アジアの国々もすでに3.0社会をめざしています。一方、日本はようやく2.0に移行しようとしているところです。

2.0は飛び越えて、リスクを恐れず、教育、文化などさまざまな分野で小さな一歩を踏み出すことが今、切に求められているのだと思います。

特集Photo 但馬一憲/講談社

お知らせ

◆理事会・評議員会が開かれました

5月23日に開催された第8回理事会では、監事の監査を受けた2012年度の事業報告と決算書類が承認されました。第4回評議員会は、6月6日に開催され、事業報告の内容が報告されるとともに、決算書類が承認されました。どちらも下記TJFウェブサイトのページでご覧いただけます。

▶www.tjf.or.jp/jp/overview/kaikei.html

任期満了に伴い、2013年6月6日の評議員会にて理事および監事が選任されました。理事6名と監事2名が再任され、新たな理事2名に就任していただくことになりました。また、2012年3月末日で退任された草場宗春評議員の後任として1名の評議員が選任されました。

〔再任理事6名〕 上野田鶴子氏、梅田博之氏、
金丸徳雄氏、輿水優氏、
内藤裕之氏、渡邊幸治氏

〔新任理事2名〕 境一三氏、佐藤郡衛氏

〔再任監事2名〕 木村芳友氏、清水至氏

〔新任評議員1名〕 長瀬眞氏

6月14日付にて、渡邊幸治氏と内藤裕之氏の2名が代表理事に選定され、渡邊氏が理事長に、内藤氏が常務理事にそれぞれ再任されました。

■TJFの事業を支えてくださっている皆さま

TJFは皆さまからご協力、ご支援をいただいで事業を行っています。財団の経済的基盤を強固にし事業をさらに発展させるために、賛助会員制度を設けるとともに、コラボレーターとしての協力をお願いしております。

2011年度と2012年度につきまして、PST(パブリックサポートテスト：NPOが広く市民から支持されていることを、年平均100人からひとり当たり3,000円以上の寄付を受けていることで示そうとする基準)の要件を満たすことができました。これにより、内閣府より認定を受けて、今後5年間、個人寄付者の皆さまに確定申告の際、減税効果の高い【税額控除方式】を選択していただけるようになりました。改めてお礼申し上げます。

今年度も以下の方々をはじめ多くの方々に支えていただきながら、事業を進めてまいります。
(渡邊幸治)

〔出捐企業〕

(株)講談社様
王子製紙(株)様
凸版印刷(株)様
(株)三菱東京UFJ銀行様
大日本印刷(株)様
日本製紙(株)様

〔法人賛助会員〕

伊藤忠紙パルプ(株)様
鹿島建設(株)様
共同印刷(株)様
近代美術(株)様
(株)講談社ビジネスパートナーズ様
興陽製紙(株)様
(株)国宝社様
誠和製本(株)様
第一紙業(株)様
大二製紙(株)様
(株)太洋社様
(株)トーハン様
凸版印刷(株)様
日興紙業(株)様
日本出版販売(株)様
日本図書普及(株)様
(株)フォーネット社様
二葉製本(株)様
丸王製紙(株)様
丸紅紙パルプ販売(株)様
三井住友信託銀行(株)様
(株)三菱東京UFJ銀行様
(株)本貴様
王子製紙(株)様
春日製紙工業(株)様
キングレコード(株)様
(株)廣濟堂様
(株)光文社様
国際紙パルプ商事(株)様
(株)資生堂様
(株)世界思想社教学社様
(株)第一通信社様
大日本印刷(株)様
(株)電通様
図書印刷(株)様
豊国印刷(株)様
日商岩井紙パルプ(株)様
日本製紙(株)様
(株)博報堂様
富士ゼロックス東京(株)様
北越紀州製紙(株)様
丸住製紙(株)様
(株)三井住友銀行様
三菱製紙販売(株)様
(株)ムサシ様
(株)彌生洋紙店様

※2013年度の会費をまだお振り込みいただいでいない方は、どうぞよろしく
お願いいたします。

〔個人賛助会員〕

市原徳郎様 岩野忠昭様 大内幹雄様 小貫邦夫様
カイト由利子様 重村博文様 鈴木茂次様 高崎孝様
高嶋伸和様 中野佳代子様 浜田博信様 細谷美代子様
松井外恵様 柳川敦重様 ほか1名

〔助成団体〕(2013年度の事業に対して助成が決定している団体)

公益財団法人双日国際交流財団 様
在日本中国大使館教育処 様
公益財団法人東華教育文化交流財団 様
公益財団法人日韓文化交流基金 様
公益財団法人三菱UFJ国際財団 様

〔個人寄付者〕(2013年4~6月)

○4月
任喜久子 様 杉谷真佐子 様 ほか1名
○5月
市原徳郎 様

○6月
金子史朗 様 佐野実 様 佐木瞬 様ほか2名

■コラボレーターの活動とfacebookの報告

コラボレーターの馮小喆様に「好朋友web」中文版(www.tjf.or.jp/haopengyou/ch/)の中国語のチェックをしていただきました。

TJFの公式facebookページのファンになってくれた人が6月1日に300人を超え、その後1ヵ月で50人近く増えて、目標である1,000人達成に手応えを感じています。facebookでは、スタッフの出張レポート、TJFの主催事業や協力事業のご案内を日々発信しています。ぜひご覧ください。(藤掛敏也)

▶www.facebook.com/TheJapanForum

レポート

寄付キャンペーン

「りんご記念日」へ熱いメッセージを!

6月22日、26回目の創立記念日にTJFは「りんご記念日」寄付キャンペーンを開始しました。「多様なことばと文化にふれ、目をひらかれる喜びを若い人たちに伝えたい」「違いを乗り越えていくしなやかさを育てたい」そんな熱い想いを結集し、広くPRしていこうという企画です。キャンペーンウェブサイトのカレンダーで自分の「りんご記念日」を選んで、メッセージを投稿し、一口3,000円以上をTJFにご寄付いただくとメッセージが公開される仕組みです。



都さんの りんご記念日

1月27日



私は日本の学校において英語の教師こそ、言葉について教えてやれるいちばんの存在であるはずだと考えており、生徒に、英語があまたある人間の言語のひとつであることに気付かせ、英語以外の言語に対する興味や関心や、母語である日本語を考える視点も育てたいと考えながら教えたいと願っています。(一部抜粋)

■一人ひとりにとってのりんご

「りんご」は、自分にとっての外国語、隣の人とつながるためのことです。TJFコラボレーターとの交流会で「あなたのりんごは何ですか」と問いかけると、旅先や転居先、あるいは教室で、ことばや文化の違いを体験したり、人と出会って周りの世界が違って見えるようになったりした日のエピソードが次々と語られました。いまの自分の小さな「原点」になったと思える日、例えば、遠い国の切手が宝物になった日、世界一長い名前の首都を覚えた日、K-POPの歌詞を辞書で調べた日など、これが「りんご記念日」です。

胡興智さんの りんご記念日

1月15日

■未来を担う世代へのメッセージを

記念日に私たちはプレゼントを贈りあったり、一緒に食事をしたり、語り合ったりします。ではりんご記念日をどのように祝ったらよいでしょうか。TJFは「次の世代の人たちに同じ出会いを贈る日」にしたいと考えました。

このところソーシャルメディア上には近隣諸国の人たちに対して嫌悪感を隠そうともしない発言が多く見受けられ、デジタルネイティブともよばれる若年層への影響が見過ごせません。私たち、「りんご」との出会いを経験した者が集まって、違いへの寛容、乗り越える意志と力の大切さを発信できたら、それは大きな贈りものになります。

■3,000円の寄付のできること

外の世界に向かって一步を踏み出すことは決して簡単なことではありません。財団法人日本青少年研究所が日米中韓の高校生を対象に行った調査によると、留学したいと回答した高校生は韓国が8割強なのに比べ、日本は5割弱です。留学したくない理由として、「自分の国がもっとも暮らしやすい」「ことばの壁がある」「海外で暮らす自信がない」が多く挙がっています。異なることばや文化の背景をもつ若者たちが違いを越えて、共感や理解を深め、共に社会をつくってほしいと思います、TJFはさまざまなプログラムを行っています。交流プログラムに参加し



母は横浜育ちの華僑、父は高校と大学という青春時代を日本で過ごした留学生だったので、父母が日本語で「おやすみ」と挨拶するのを子供の頃から聞いて育った。(中略)

よく日本語を学ぼう

と思ったのはなぜか聞かれるが、うまく答えられない。もしかしたら、その理由の一つにこの父母の温もりが感じられ、心地よい響きを持つ「おやすみ」に出会える縁があったからだと言えるかもしれない。(中略)

隣語の日本語は、私と父母とを結ぶ大切な絆なのであり、また、二つの故郷につながる架け橋でもある。

た高校生は、内心では「(英語や中国語を)まちがえるのが怖いかならなべく話さないようにしよう」と思っていたそうです。でも課題をこなすためには話をしなければならず、何とかして伝えようとすると、相手も熱心に聞いてくれて、自信がもてるようになりました。

異なることばや文化の壁の前に立ちすくむ若い人たちの背中をほんの少し押すだけで、彼らの世界は大きく広がっていきます。ご寄付はこうした機会づくりに使わせていただきます。

ひとりでも多くの方と一緒に「りんご」の実る丘を拓げていきたいと願っています。(安藤まどか)

佐木瞬さんの りんご記念日

3月21日



2007年3月21日。写真の専門学生だった私の壮大な旅がスタートしました。半年間、アジア10カ国を巡る撮影研修に旅立った日です。当時東京で一人暮らししていた家も引き払い、バックパッカー一つでの船出。不安もたくさんありましたがこの旅は自分の大きな財産になっています。(中略)

知らない土地で知らない人と話すのは勇気があるけど、どんな絶景よりおいしいご飯より私は一緒に語り合った日を鮮明に思い出します。世界人になりましょう。

Q: キャンペーンに参加するには?

A: インターネットで「りんご記念日」と入力して検索するか、www.tjf.or.jp/ringokinenbi にアクセスしてください。寄付して記念日を設定し、メッセージを投稿できます。

Q: 思い出のできごとが何月何日かわからないのですが?

A: 誕生日やフランス革命記念日などにしてもいいですし、寄付すると決めた日を、隣語にふれる大切さを思い起こす日にするのもオススメです!

ご関心のある方はお気軽にお問い合わせください。

●電話 03-5981-5226 ●FAX 03-5981-5227

●メール ringokinenbi@tjf.or.jp 担当: 安藤

日韓の中高校生交流プログラム ダンスダンスダンス 東京でもダンス・ダンス・ダンス

羽田空港で解散してから約1ヵ月後の4月28日、日韓の中高校生交流プログラムに参加した女子高校生9名が、報告会に出席するため再び東京に集まりました。日曜日の午後にもかかわらず、協力団体の関係者はもちろんのこと、参加者の家族や生徒を送り出した先生方が多数集まってくれました。

■ 出発前のわたしと帰国後のわたし

報告会開始前にプログラムの振り返り活動を行いました。事前研修で設定した目標とソウル滞在中に得られた気づきで埋められた模造紙を見ながら、三つのグループに分かれて、「プログラムを体験した後の今のわたしは、こんな人」を用意された左の足型シートに、右の足型シートに「プログラムに参加する前のわたしは、こんな人」を書き込みました。その作業をしながら、右足から左足はどのように変わっているか、変化はどんなことによって起こったと思うかを話しあいました。

報告会の冒頭は、ソウルでの5日間をまとめた3分間のビデオの上映。それに続いて、参加者がグループごとに前に出て、各自の模造紙を見せながら、一人ひとりが自分のことばで参加した感想を発表しました(右上写真)。高橋未夢さんは、ソウルで구렁그나(そうなんだ〜)、그레!(そう!)など会話に必ず出てくる表現を覚えて帰国しました。週に一度は韓国語でやりとりする韓国の友だちができて本当によかったと振り返りました。山下美誓さんは、現地に行ってみて「韓国人が日本にとっても興味をもっているのだと知った」と話し、「いろいろな国に行って、その場所に住んで、さまざまな国の人の生き方を知るという新たな目標ができた」と報告しました。

それぞれの発表後、グループの他のメンバーからその人に対するコメントを一言ずつ加えてもらいました。例えば、最初は、韓国語を話すことを躊躇していた鄭世任さんは、「韓国語がとても上手で、本当に頼りになりました」と言われ、自信をもったようでした。「得意のダンスと笑顔で、日韓の隔てなく、周りを明るくしてくれた」と言われた服部芽衣さんは、とても嬉しそうでした。ダンスもあまり得意じゃ



◎オフィス写真部 佐木瞬

ないし、韓国語もまだまだこれからと自分を振り返った三浦映那さんは、「K-POPやファッションにくわしくて、誰の話もよく聞いてくれるお姉さん」だそうです。

最後に、ソウルで日韓混合の2チームに分かれて練習、発表したダンス、少女時代の「I got a boy」を、日本人だけのチームで披露しました。ソウルでそろえたファッションで全力を出し切って踊る姿は、はじめて生で見た人たちに感動を与えていました。

■ 交流の場

報告会後に行われた懇親会では、それぞれが自分の模造紙の脇に立ち、応援して下さった方々に模造紙につづったことや感想などを話していました。

ある参加者の保護者の方からは、「娘は興奮して帰ってきました。ホームステイをしたことで、想像していただけた韓国が身近なものとなり、またすぐにでも韓国に行きたいと言っています。こんなにすばらしいプログラムに参加する機会を与えてくれて感謝しています」と言っていました。また、「次回は男子生徒が参加するといひね」との声もあり、今後の課題の一つと受け止めました。

■ 第2回の実施に向けて

2013年12月に第2回を実施する予定で、テーマは引き続き韓国語を学習している中高校生の関心に寄り添うK-POPダンスにしました。互いのことばを学ぶ日韓の生徒各16人、計32人が同じ宿舍で5日間を過ごし、交流する時間を増やします。

現在、参加者募集中です。詳細はこちらをご覧ください。

▶<http://link.tjf.or.jp/dance3>

ここから前回のプログラムの様子も動画でご覧いただけます

韓国語やダンスに関心のある男子高校生の皆さんのたくさんのご応募をお待ちしております! もちろん女子の方も!
(中野敦)

左から、高橋未夢さん、蓮田なつみさん、荒木さくらさん、西野菜々美さん、山川友梨子さん、三浦映那さん、服部芽衣さん、鄭世任さん、山下美誓さん

◎オフィス写真部 佐木瞬



高校生・大学生が記念日をレポート

ウェブサイト「くりっくにっぽん」の「1/365」コーナーでは、日本の高校生と大学生レポーター7人が、伝統的な行事や学校行事、自分の記念日をどう過ごしたのかを写真とともに紹介しています。彼らが書いたレポートを日本語のほか、中国語、韓国語、英語に翻訳して発信しています。翻訳を担当してくださっている方のなかには、中国と韓国の出身者で日本の大学院で学んでいる留学生もいます。

4月21日に、レポーターと翻訳者を事務所に招き、交流会を実施しました。初めての顔合わせで、高校生たちは少し緊張の面持ちでしたが、漢字一文字で自己紹介をしていくうちに、少しずつ気持ちもほぐれていきました。洋楽が大好きでチャアリーディングで活躍しているNutsさんは「洋」を選びました。ひなのさんは「作」で、お菓子作りや洋服作りが好きな自分が、どんなものを作っているのか紹介してくれました。



「教科書で知った年中行事のリアルな過ごし方がわかっておもしろい」「同じひな祭りでもいろいろな過ごし方をみることができるのはとても興味深い」という翻訳者の発言に、レポーターたちは自分が書いた記事がどう読まれているのかを知って、これからもっと頑張って記事を書きたいと語っていました。

レポーターはこれまで関東在住の人たちだけでしたが、今年度は沖縄の高校生が加わりました。自分の一日を切り取って発信したいと思う高校生、大学生の方、ぜひレポーターになってください。clicknippon@tjf.or.jpで随時受け付けています。(森亮介)

外国語教育関連事業

『外国語学習のめやす』好評発売中

2013年1月に『外国語学習のめやす』(市販版)を発行して以来、各語学教育関連の学会や研究会の会場で販売するとともに、TJFのウェブサイトでも注文を受け付けてきました。これまで半年間に直接販売で527冊、ウェブ経由で114冊販売しました。日本国内はもちろん、エジプト、ドイツ、オーストラリア、韓国、中国、台湾、モンゴルなどからも注文がありました。

学会会場では、『外国語学習のめやす』を手にした方から、教えている言語や対象を問わず、多くのコメントをいただきました。「とにかく表紙がかわいいから買っちゃいました」、「理系の留学生たちに日本語を教えています、『めやす』はとても使いやすい。文化や社会とつながって教えるアプローチも留学生の日本理解に役立つ」(大学教員/日本語教育)、「英語教育ではまだ足りない視点を『めやす』が多く提示しています。もっと英語教育にも取り入れるべきです」(大学教員/英語教育)など。こうしたコメントはTJFはもとより開発に関わったメンバーの方々にも励みになっています。

また、2013年4月開始のNHK「テレビで中国語」の教材は、「学習のめやす」のコミュニケーション能力指標も参考にして作成されています。

『外国語学習のめやす』を手にしただけで終わらせず、また開発に携わったメンバーだけのものにとどめることなく、21世紀にふさわしい新しい外国語教育をめざすチャレンジャー全員のものになることを願いつつ、独自の研修会の開催や自主的勉強会への協力などさまざまな事業を展開していきます。(長江春子)

2013年4月・5月・6月

ほかにこんな活動をしました

- 『国際文化フォーラム通信』no.98「人をつなぐ『ともだち』日本語」を発行[4月]
- 「中高校生のための韓国語講座2013」を駐日韓国大使館韓国文化院、同世宗学堂と共催[毎週土曜日、2014年3月まで/東京]
- 明治大学国際日本学部2年演習A(横田ゼミ、毎週火曜日)のカリキュラムを共同作成、聞き書きワークショップ[6月25日]を実施
- 『NIPPON3.0の処方箋』(當作靖彦著、講談社刊)の編集に協力[4~6月]
- 桜美林大学孔子学院主催「高校生のための中国語講座」の広報に協力[5~6月/神奈川]
- 「協働を生み出すプログラムづくり」事業の一環として、コミュニケーション力とコラボレーション力の育成をめざした外国語のカリキュラムを専門家とともに作成。沖縄県立向陽高等学校の協力を得て、同校国際文科中国語コース2年生を対象に実施[~2014年3月/沖縄]
- 日本語教育学会2013年度春季大会のポスターセッションにて「外国語学習のめやす」のフレームワークを発表[5月26日/東京]
- 日本言語政策学会2013年度研究大会の分科会「日本の外国語教育政策」で「外国語学習のめやす」について発表[6月2日/東京]
- 2013年高等学校中国語教育全国大会を後援[6月15、16日/名古屋]
- 第6回「漢語橋」世界中高生中国語コンテスト西日本地区予選大会(中華人民共和国駐大阪総領事館教育室、立命館孔子学院共催)を後援[6月30日/京都]

掲示板

『NIPPON3.0の処方箋』で明らかになるSNA

TJFが、2006年から取り組んだ「外国語学習のめやす」の開発。この「めやす」の監修者、當作靖彦氏が提唱するソーシャルネットワーキングアプローチ（SNA）を論じた『NIPPON3.0の処方箋』（講談社）が刊行されました。

TJFが編集に協力した同書では、SNAとは何か、そしてグローバル化が進み、Version3.0に向かっていく世界の国々から日本が取り残されないためにいかなるアプローチが必要かが明らかにされています。

いち早く読んでくださった方から寄せられた感想を紹介します。

——外国語学習はぶっつけ本番で「つながる」から始めたほうが効率的なこと多い、という一文がありました。私自身の外国語学習体験を振り返っても、まさにそうだったし、それが言葉、外国語に興味を持つきっかけにもなったので、この部分に強く共感。つながる経験を通して物事を学習するアプローチは、数年前から私がめざし、試行錯誤している外国語授業の在り方に通じるものでもあって、強く背中を押された気持ちがありました。

各地の大型書店のほか、amazonなどのオンラインショップで入手できます。

装幀：菊地信義



『SEOULでダンス・ダンス・ダンス(ダンス・ダンス・ダンス)2013』

参加者募集!

韓国語を学ぶ日本の中高生と日本語を学ぶ韓国の高校生がソウルで一緒にK-POPダンスを踊って交流を深めるプログラムです。ソウルでは韓国語を学んだり、買い物や料理などの体験もできます。

ダンスが得意じゃなくてもみんな練習するので心配はいりません。韓国語があまりできなくてもダンスを通じて交流するので大丈夫です。韓国語や韓国、K-POPに興味をもっている中高生に、ぜひご紹介ください。

期間……………2013年12月25日(水)～30日(月)
※25日は東京で事前研修を行います。

場所……………大韓民国ソウル特別市

対象……………15歳以上18歳以下で、日本の中学校・高校に在学している方
(2013年12月プログラム実施時)

主催……………財団法人秀林文化財団(韓国)
公益財団法人国際文化フォーラム(日本)

特別共催……………秀林日本語学校韓国事務所(韓国)

助成……………公益財団法人双日国際交流財団
公益財団法人日韓文化交流基金
国際交流基金ソウル日本文化センター(申請予定)

後援……………秀林外語専門学校

協力……………韓国日本語教育研究会
高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク

輸送協力……………ANA

参加費……………30,000円

応募方法……………プログラムの詳細については下記のサイトをご覧ください。
参加申込書と自己紹介シートをダウンロードして、必要事項を記入の上、国際文化フォーラム宛に郵送してください。
なお、同サイトで2012年に実施した第1回プログラムの様子を動画で見ることができます。

締め切り……………2013年9月24日(火)必着

▶ <http://link.tjf.or.jp/dance3>

『国際文化フォーラム通信』をお休みします

1987年の財団設立以来26年にわたって発行してきました本誌『国際文化フォーラム通信』を、この99号をもっていったんお休みとします。今後は、新しい形で皆さまとつながっていきたくと考えています。なお、11月頃に100号にあたる記念版を皆さまのお手元にお届けします。

長期にわたってご愛読いただきましてありがとうございました。今後もうざよろしく願い申し上げます。

● TJFは1994年に高等学校の中国語教育の事業に、1997年には同じく韓国語の事業にも取り組み始めました。この二つの言語を、日本にとって隣国、隣人のことばであることから「隣語(りんご)」と呼んできました。今回、「隣語」の意味を改めて考え、隣の人とつながるためのことば＝自分にとって大切な外国語、に広げました。もちろん、中国語と韓国語が大切なことばであることに変わりはなく、TJFは引き続き中国語教育や韓国語教育に関連した事業を進めていきます。

● ニュースで紹介した「りんご記念日」は、自分にとっての「りんご」にであった大切な思い出の日です。私にも忘れられない「りんご」があります。

● 実家のお隣さん、アンリ・ポール・デグチ家は、ドイツ人のおばあちゃん、フランス人のお父さん、ベトナムにルーツをもつお母さん、インターナショナルスクールに通うココ、モニク、ナミの3兄弟の6人家族。初めて家に招かれたとき、靴をぬがずに家に入ったり、お風呂とトイレが一緒になっているのにすごく驚いたことを今でもよく覚えています。最初は居心地の悪さを感じたものの、それを超えるワクワクがたくさんありました。おばあちゃんが焼いてくれたケーキは、お店で売っているものとはまったく違うものでした。大きなクリスマスツリーの下に用意されていたプレゼントの箱には、当時日本では手に入らないパービー人

形の洋服が入っていました。毎朝、学校に向かう私にお父さんがかけてくれたことば「Bonjour!」は、私が初めてであったフランス語です。大学でフランス語を専攻する大きなきっかけとなりました。

● TJFで仕事を始めた翌年の1995年秋、「第4回全中国外国語学校中高生日本語弁論大会」の事務局の一員として初めて中国に出張し、上海外国語学校の先生方と一緒に大会の準備作業をしました。日本語科、英語科、フランス語科の先生方とは、なんとか意思疎通することができるのですが、ある日ロシア語の先生とペアを組むことになりました。彼女が話すのは中国語とロシア語。私との間に共通のことばはありません。ジェスチャーと筆談だけでつないだ数時間。隣にいるのにコミュニケーションがままならない。このとき、私は中国語を習おうと決めました。これまでいろいろなことばにチャレンジしてきましたが、人とつながるためのことばをまさに実感したのが中国語なのです。

● きっと皆さんにも「りんご」とのであいがあると思います。そのときの想いを存分に語ってください。「りんご記念日カレンダー」にあなたの一日を用意してお待ちしています。

水口景子

編集後記

国際文化フォーラム通信99号

2013年7月

発行人……………内藤裕之
編集人……………水口景子
アートディレクション……………鈴木一誌
デザイン+DTPオペレーション……………大河原哲
出力・印刷・製本……………凸版印刷(株)
校閲・校正……………天山舎
表紙写真……………大木茂
(インド・マハーバリプラムで撮影。7、8世紀頃に王が象数頭を使ってこの岩を動かそうとしたがピクともしなかったという言い伝えがある。千数百年そのまま動いていないという)

公益財団法人 国際文化フォーラム

〒112-0013
東京都文京区音羽1-17-14
音羽YKビル3階
Phone: 03-5981-5226
Fax: 03-5981-5227
E-mail: forum@tjf.or.jp
www.tjf.or.jp